

影なる王女



第四章

轟々たる滝の音が、静寂な山中に響いていた。

再び来た……。

稚建皇子は、足下の谷川を見下ろした。激しいその水の流れば、かの行幸の折り、白髪の女に出会ったかの滝壺から流れて出てきていた。

皇子はしばし足をとめ、鬱蒼たる樹々の連なりの向こうにあるはずの滝を見つめた。おおもとのかなむら 大伴金村の邸の苦屋に閉じこめられていた女は、影皇女に違いない。皇子はそう確信した。あのととき、いったんは彼の手に噛みつきながら、傷口を拭いてやるにつれて、硬い面もちは和み、眼に喜びが漲った。

血のつながり。同じ母の腹から生まれた者同士のみに通じる感情が、あのとときにはあった。

「汝はこれにて待て」

皇子は、傍らに跪く下部に言った。下部は背を丸め、地に額をつけた。

皇子は、山道をのぼり、深い木の茂みのなかに消えた。

しばし歩くと、滝に出た。

見回したが、白髪の女の姿はない。

皇子は、足下の大きな石に腰をおろした。

影皇女とのわずかな語らいの翌日、皇子は眠らぬまま朝儀の席に連なった。大伴金村と眼があつたが、金村は拝礼したのみで、その面もちには何も浮かんでいなかった。

託宣を伝える息長皇^{おきなのおおきさき}后の眼の縁の隈を、皇子は見逃さなかつた。皇后も眠つてはいなかつたのだろう。だが、美貌と放漫な四肢が放つ気は、常にもまして艶やかだつた。それを見て、皇子は意を決した。

もう一度、比叡^{ひえ}の滝で白髪の女に会う。

会つて、吾田媛^{あだひめ}のこと、妹の影皇女のこと、己が生まれて後この方、皇后と稗田^{ひえだ}の史人^{ふひと}どもがこしらえ上げた偽りの史に隠された、まことの経緯を問う。

皇子は下部を一人呼び出し、伴をせよと命じた。下部は拒んだ。下部の主^{あてし}は皇子であつて、皇子ではない。皇子の下部となるよう命じた息長皇后こそが、主であつた。

そもそも皇子が、自らの意を、下部どもに命じたことはない。皇子に如何に使えるかは、皇后によつて定められており、皇子は、そう定められたように動いた。

皇子は、ひとり淡海^{おうみ}に赴くことによつて、生まれてはじめて、皇后に背いた。背かぬまでも、皇后の意を越えて行動した。そのことが後に、皇子に何をもたらすかは分からない。だが、皇子は不思議とそのことを恐れなかつた。

皇后は、日継^{ひつぎ}の皇子の母たることで、ヤマトを支配している。日継の皇子の母でなければ

ば、豪族どもが従うかどうかは、分からない。春日郎女^{かすがのいらつめ}が皇子に言った「ヤマトの乱れ」とは、豪族どもが皇后に従わぬ様を指すのであろうが、皇子はそこまで考えを及ぼさなかつた。

ただ、己と皇后との間に、血のつながりがないことが証されれば、長年欲してきたことを行うのに、障りはなくなる。

皇后を犯すことに。

滝の水音と、時折の鳥の囀^{さえず}りや木の葉のざわめきの他、何の音も響いてはこなかつた。

果たして白髪の女は現れるか。

現れるまで待つ。

皇子は石のように動かなかつた。ただ、ひたすら待つた。

どのくらい待たされるのか……。

ひとり、谷川のほとりに座つた下部は、近くの草を引きちぎりながら、手持ち無沙汰にあたりを見回した。

皇子に強く請われ、衣や玉を下されて、しづしづ承知したものの、行き先は告げられていながつた。まさか、淡海の地まで伴をすることになるとは、思つてもいないことだつた。

まだ若い下部の足下に、虫が這つていた。下部は、腹立ちまぎれに、その虫を沓^くで踏み

つぶした。虫は、青い体液を吐き出して、動かなくなった。

舌打ちして立ち上がり、谷川の水に口をつけ、呑もうとしたとき、水音がした。

下部は、貌かおをあげて、音のしたほうを見た。

川の中にひとが立っていた。

女……？

下部は眼を見開いた。

たしかに女だった。伸びた髪の毛を乱雑に後ろに束ね、獣皮を腰に巻き付けるばかりで、大きく実った胸乳が誇らしげにさらけだされていた。一重まぶたのきつい貌かおだけは、だが、厚い唇ゆえに、艶つやめいた気に満ちていた。背が高く、肩幅が広く、腕や脚は筋がたくましく盛り上がっている。

手に蔓つるを編んだ籠かごと、笹で通した二尾の川魚を持ち、腰に石を削った山刀やまばを提さげている。里人ではない。山の民であろう。

女は、じつと下部を見つめ返していたが、眼を逸らし、知らぬげに川からあがり、そばを通りすぎようとした。

「汝なれは……」

下部は立ち上がった。唇が醜く歪よこんでいた。

「山の者か」

女は足を止めたが、すぐに歩き出した。

「待て」

下部はだらしなく笑いながら、女の腕をつかんだ。

「吾われは宮処人みやこぢひとである。故あって人を待っている。しばし、語らいなどしてゆけ」

「語らい？」

女は振り向いて下部を見た。眼が厳しく細められている。

「然り。汝なにおは難波なにわの宮処みやこぢを知るまい。珍しい話など、聞かせよう」

「聞きたくない」

女は下部の手を振り払い、歩き出そうとした。

「汝は、宮処人の言をないがしろにするか」

下部は腹をたて、女の肩をつかんだ。

女は振り向いた。下部は左右の手で、豊かな女の乳房をつかみ、押し倒そうとした。その瞬間、凄まじい激痛が、下部の下腹部を襲った。

女は、下部の股間を膝で蹴り上げていた。

下部は両手で股間を押さえ、うずくまった。息をすることもできなかった。

女は下部の顎を蹴った。下部は仰向けに転がった。女は、その股間を思い切り踵で踏みつけた。ふぐり玉がともに潰れ、下部は断末魔の絶叫をあげて、血反吐ちへどをはいた。

不意の悲鳴に、皇子は腰を浮かした。

悲鳴は、伴を命じた下部のものだった。何が起こったか分からぬまま、皇子は立ち上がり、もと来た道を駆け戻った。

谷川のほとりに出たとき、皇子は、伴の下部が下腹部を真つ赤に血で染め、白眼を剥き、細かく痙攣しつつ、あおむけに倒れているを見た。その傍らに、上半身を裸にさらした女が立っていた。

女が駆けた。みるみる皇子に迫り、脚をあげてその股間を蹴り上げた。

女の足の甲が、皇子のふぐり玉を押しつぶした。春日郎女とはくらべものにならぬ凄まじい力だった。

皇子の眼の前が闇に閉ざされ、全身が硬く強張り、恐ろしい苦痛と嘔吐が、腹の底から沸き上がった。膝が溶けたように力を失った。

「吾は……」

皇子は地に倒れながら、声を振り絞った。

「稚建皇子……」

「皇子？」

皇子の喉笛を踏みつぶそうと足をあげていた女は、その動きを止めた。

「然り……稚建皇子……」

皇子は両手で股間を押さえ、七転八倒しながら呻いた。

「白髪の女に会いに来た……女に問いに来た……吾が母、吾田媛のこと……吾が妹、影皇

女のこと……」

女は凝然と、苦しげな息の下から皇子が発した言葉を聞いていたが、やがて、手を差しのばした。

「立てるか？」

女が穴を掘り、事切れた下部の屍を埋める間、皇子は袴を脱ぎ、下半身を川の水に浸した。

「汝の下部は、吾を姦そうとした。故に殺した」

皇子は応えなかった。下部の死を悼む感情は起こらなかった。皇子の心を占めているのは、不快感だった。

女にふぐり玉を蹴られ、それは苦痛以外のなにものもたらさなかった。赤黒く腫れあがり、灼けるような痛みに含まれていた陰囊は、ようやく冷たい水に熱が去り、痛みが和らいでいた。それでも、腹部が引きつるような鈍い痛みも、嘔吐感も去ってはいない。

「汝を殺す気はない。後で吾が栖に連れてゆく。今宵はそこで休め」

女は、楽しげに謡うように、下部の屍に土をかぶせながら言った。

「ふぐり玉の痛みは、一日では去らぬ。潰れなかっただけでも、幸いと思え」

「汝は……」

皇子は、うつろな眼で言った。頭が、熱を帯びていた。

「この山に住まう、白髪の女を知らぬか」

「阿礼の阿母のことであろう」

「阿母？」

皇子は思わず、腰を浮かした。女は、手を動かしながら続けた。

「吾は八歳のときから十六年、この山に住まう。阿礼は、ずっと吾を、母の代わりに養い育てた。山の中で会った時から、眼は見えず、口はきけず、手もなかったが、吾に字を教え、鳥や獣、魚の狩り方を教え、肉や木の実を如何に料理るかを教えた。もとは宮処人だったというが、山の民の生業にも詳しい。吾は阿礼の阿母から、山で生きる手だてを教わった」

女は一瞬手を止め、皇子に向かって微笑みかけた。その面もちにも声音にも邪気がない。

女は、皇子がこの地に現れるのをあらかじめ知っていたのではないか……。皇子は、ふとそう思った。

「吾が名は笹葉。十六年前、ヤマトの豪族どもが相争い、淡海の地まで乱れは及んだ。吾が父も吾が母も、その折りに死んだ。やがて軍は鎮まったが、親のない吾は、安曇の里人に追い使われ、手ひどく扱われた。故に里を棄て、山に入り、阿礼の阿母に会った」

下部を埋め終えると、笹葉は、皇子の傍らに歩み寄り、川から上がるよう促した。

「吾が十三になった頃、里の男どもが、吾を姦そうと、山にやってくるようになった。だが、吾は阿母から、男をうち負かす術を教わっていた。ふぐり玉を潰せばよいと」

笹葉の眼差しが、水の下の皇子の股のあたりに注がれていた。皇子は慌てて、手でそこを隠した。笹葉は哄笑した。

「汝が母の吾田媛も、多くの男のふぐり玉を潰したと阿母に聞いた。汝の父なる小碓皇子も、吾田媛にふぐり玉を潰されて死んだ」

皇子の眼が大きく開かれた。

「続きを聞きたければ、ともに来よ。阿礼の阿母に会わせるから、後は阿母に聞け」

言うなり、笹葉は水辺に置いた皇子の剣を手に取り、刃を抜いた。切っ先を皇子の喉元に突きつけ、しかし穏やかな笑みを浮かべたまま命じた。

「疾う、水より出でよ」

水からあがるなり、皇子は後ろ手に組み伏せられ、縄を打たれ、目隠しをされ、背後の笹葉の命じるままに歩かされた。

どのくらい歩かされたろう。山道を登ってはくんだり、登ってはくんだり、道なき林を抜け、凹凸の激しい巖の上を歩かされ、足裏の痛みすら感じなくなるまでになったころ、

「止まれ」

と、目隠しを外された。

四方を樹々に囲まれた狭い窪地だった。足下に、湧き水があった。

窪地の中央に、笹葉の柶があった。地面を掘り下げ、周囲に円錐形の木を組み、枯れ草

や柴を葺いている。

「入れ」

笹葉に促され、狭い入り口をくぐると、地面に藁を敷き詰め、中央に炉が穿たれている。天井から干した肉や魚、木の実が垂れ下がり、隅には壺が幾つか置いてある。

「阿母は、鳥の声を聞きに出ている」

「鳥の声？」

「眼が見えない故、鳥の囀りを聞くのが娯しみらしい」

笹葉は、炉に火を熾すと、手に提げた二尾の川魚の口に竹の串を刺し、炙りはじめた。それから籠に入れた橡の実を壺に入れた。橡の実は、数日、水につけて灰汁を抜き、粉に挽いて丸め、蒸して喰う。

やがて、魚の肌が焦げ始め、油のはぜる音が鳴りはじめた。

笹葉は、弓矢や籠を隅に整えると、天井から吊した木の柄杓をおろし、ひとつの壺から液体をすくって木の椀に入れ、炉端に腰をおろし、突つ立ったままの皇子を見上げた。

「汝も座れ」

皇子の足下に椀を置いた。

皇子は、おそるおそる膝を曲げて藁の上の坐し、椀を手に取り、口をつけ、噎せて吐き出した。笹葉は手を打って笑った。

「酒はまだ呑めぬか」

皇子は袖で口を拭った。笹葉は、相変わらず豊かな胸乳をさらし、どっかど床に尻を据え、胡座をかいている。腰に巻いた獣皮の隙間から、陰が露わになりそうだった。

笹葉は、炉から魚の串を取り出し、皇子に手渡した。

「喰え」

皇子は、串を手にしたまま、動かない。

笹葉の所作は、日継の皇子へのそれではなかった。否、若い男へのそれでもなかった。恥じらいとでもいうべきものを微塵も見せぬその大胆さは、皇子を威圧するばかりだった。

「何故に喰わぬ」

笹葉は、いぶかしげに首を傾げた。皇子はやつと口を開いた。

「阿礼は……？」

「時には、二日三日、帰って来ぬぞ」

笹葉は笑い、天井に吊した干し肉を手に取り、串に刺して炙りはじめた。皇子は驚いて、笹葉を見た。

「眼は見えずとも、耳で音を聞き、肌で風を知り、山の生りものを口にすれば、二日三日、山中を動いても、生きていられる」

「されど……」

「汝は知りたのである。吾田媛や、影皇女のことを」

笹葉は、炙った肉をかじり、椀の酒をひとくちに飲み干した。

「ならば、待つしかあるまい」

笹葉は炙り肉と干した木の実を食い終えると、炉の火を消し、獣皮を身に巻き付け、床に横たわった。

「もはや日が暮れる」

彼女は、皇子に背を見せ、欠伸をひとつ漏らし、「疾う、寝ね」と言い、やがて寝息を立て始めた。

皇子の剣は、無造作に壺の傍らに置かれている。

もし、皇子が彼女を姦そうとすれば、剣を喉に突きつけて脅しつつ、股を開かせればよい。だが、笹葉は、皇子がそんな挙には出ないだろうと、安心しきっているかのようだった。

いつの間に眠ったのだろう。

皇子が朝の寒気に眼をさましたとき、笹葉は、そのたくましい両脚を身に巻いた獣皮からのぞかせて眠っていた。

皇子は、霧のかかったような頭を振り、外に出た。湧き水を両手で掬い、口に含んだ。冷たい水が、皇子の眠っていた四肢を瑞々しく潤した。

難波の宮を出てより、舟で川を遡り、途中の岸辺の里に宿した。そして昨夜は、得体の知れぬ山の女と、苦屋で寝た。王宮と、春日郎女の寝屋でしか夜を過ごしたことのない皇

子にとって、夢のような二夜であった。

見上げれば、深い霧がたちこめる樹々に囲まれ、開けつつある空が青い。常に人に囲まれて育った皇子はいま、いづくとも知れぬ山中、天と地の間にただひとり存在。

なにもものとも知れぬ力が、腹の奥底から沸き立ち、四肢を満たしていく。皇子は眼を閉じて、不思議な快楽に身をゆだねていた。

あああああああ。

かすかに、いづくからともなく、歌が響いてきた。

魂を揺さぶる歌声。

天上からか、地の底からか。

皇子は、大きく冷たい気を深く吸い込み、吐き出した。

あああああああ。

歌声が近づいてきた。

皇子は眼を開けた。

あああああああ。

その声に聞き覚えがあった。

かの比叡の滝で、春日郎女とともに聞いた呻くような声。

皇子は腰を落とし、四囲を見回した。

林のなかから、白髪の女が現れた。

ゆつくりとした足取りで、皇子に向かって歩いてくる。

朝に目覚めた鳥の声ねが、あちこちから聞こえてきた。その都度、女はその方角に耳を傾け、唇を動かしている。

阿礼……。

朝靄のなかで眼を凝らして見れば、その白髪にも関わらず、顔立ちは丸くふつくらとして、鳥の音に合わせて唇を動かす様子は、まるで女童めわらえのよう。

あるいは、息長皇后よりも若いのではないか。

「阿母！」

背後からの声に振り向けば、笹葉が苫屋の入り口に立ち、笑顔を浮かべていた。

「帰ったか」

阿礼の女は立ち止まり、笑みを浮かべて応えた。そして、右の袖をあげて、皇子のほうを指した。袖から、手首のない腕の断面がのぞいた。

「稚建皇子が来た」

笹葉が言った。

阿礼は唇を引き締め、それから閉じたままの目尻を下げ、唇を左右に広げ、相好を崩した。そして、両腕を伸ばして皇子に歩み寄り、丸く盛り上がった腕の先端で、皇子の貌を撫ではじめた。

懐かしげに見えぬ眼で皇子の貌を見つめ、掌のない腕で皇子の貌を確かめるように撫でた。皇子は、身じろぎもせず、なされるがままに動かなかった。

やがて阿礼は皇子から離れ、笹葉に近づき、爪先で地面になにやら文字を書いた。笹葉が哄笑した。

「汝の貌は、吾田媛にふぐり玉を潰されて死んだ小碓皇子によく似ているようだ」

苫屋の炉に火が熾され、水を張った土器がくべられた。水が泡を立てはじめると、干し肉と根菜を入れ、塩を振った。

「寒かったであろう」

笹葉は、炉端に坐した阿礼の方に獣皮をかけた。

やがて土器の湯が、獣くさい匂いを放ち始めた。ヤマトの宮処人は、獣肉を食する習わしがない。皇子は思わず、鼻をおおって貌を背けた。それに気づかぬか、笹葉は柄杓で湯を掬い、椀に入れて阿礼の前に置き、振り向いて入り口に突っ立ったままの皇子に別の椀を差し出した。

「暖まるぞ」

皇子は椀を受け取り、しかし口をつけることなく、うまそうに湯をすする阿礼に眼を向けた。

「阿礼の阿母」

笹葉が声をかけた。

「皇子は、吾田媛のこと、影の皇女のこと、様々に知りたいたいと言う。阿母に代わって吾が語る」

阿礼は深くうなずいた。笹葉は、皇子に座るよう手招きし、背筋を伸ばして姿勢を整えた。

「吾は、阿礼の阿母より、字を習い、竹簡に記した。今より誦するものこそ、まことの史」

先の大王の名は忍代別の大王。

五人の妃に、五人の皇子皇女を産ませた。

すなわち、八坂媛が、大碓皇子と小碓皇子を。

水歯媛が、入彦皇子を。

竹野媛が、吾田媛を。

日向媛は、押齒皇子を。

今は皇后なる息長媛には、子がなかった。

吾田媛は、身の丈六尺

髪は縮れ、手脚はたくましく、

その大力は、素手で男を殺した。

大王は、吾田媛を好かず、

旦波の王、玖賀耳を討たせ、

つづいて朝儀に連なることを拒んだ大碓皇子を討たせた。

いずれも、兵はつけず、ただ一人。

大王は、吾田媛が戦の途中で死ぬことを望んだ。

最後に大王は、まつろわぬ国栖を討たせた。

吾田媛は、高市の津より、国栖に向かった。

高市の津は、入彦皇子が守護していた。

大王の命を受けた入彦皇子は、

謀って吾田媛を殺そうとしたが、

かえって吾田媛に殺された。

吾田媛は、険しい山々に分け入り、

途上、土蜘蛛なる女兵を味方につけ、

国栖に至った。

大王は、息長媛の祖父なる建内宿禰と謀り、

小碓皇子を国栖に向かわせ、
吾田媛を討たせた。
小碓皇子は小さく、貌は女童のようなが、
謀りごとに長けていた。

小碓皇子は国栖の王と謀り、
吾田媛を姦し、殺そうとした。
吾田媛は、姦されつつも、小碓皇子を殺し、
国栖の王を討って、国栖の王となった。

吾田媛は国栖や土蜘蛛の女兵を率い、
纏向なる大王の宮を攻め滅ぼした。
大王は息長媛とともに淡海に逃れるが、
息長媛は大王と他の妃を殺した。

淡海に至った吾田媛は、息長媛と和を結んだ。
息長媛の勧めで、吾田媛は水軍を興し、
海を渡って西なる加羅を攻めさせようとした。

しかし、吾田媛は、小碓皇子の種を身籠もっていた。
息長媛は、大將軍として二千の兵を率い、加羅に向かった。
その間、吾田媛は、稚建皇子と、影皇女を産んだ。

息長媛は、自らは海を渡らず、
土蜘蛛と国栖の女兵を渡らせ、
加羅の王に知らせ、
ために、土蜘蛛と国栖の女兵は加羅で悉く討たれた。
吾田媛は、毒を盛られて死んだ。

兵を率いて纏向に戻った息長媛は、
敵対する豪族どもを討ち平らげ、
宮処を難波に遷し、
史を改竄し、
影皇女を大伴金村の邸に閉じこめ、
稚建皇子を自らの子とした。

「阿礼の阿母は、吾田媛とともに国栖に旅した」

笹葉は言った。

「その折り、阿母は十三歳だった。息長皇后は、まことの史を知る阿礼の阿母の手を切り、舌を切り、眼を潰し、宮処から追い放った」

「阿礼は……」

皇子は、面もちを強張らせて訊ねた。

「吾田媛の伴の女兵だったのか」

「否」

笹葉は厳かに言った。

「稗田の史人^{ふひと}だった。吾田媛とともに国栖に趣、その経緯をつぶさに見た」

稗田阿礼は深くうなずき、皇子に貌を向けて微笑んだ。皇子はしばし、阿礼を見つめた。聡い女童のような面もちだった。

「稗田阿礼」

皇子は問うた。

「皇女は、大伴金村の邸の苦屋に押し籠められ、月に一度、息長皇后に責めさいなまれている」

阿礼の唇から微笑みが消え、右の耳が皇子の声をよく捉えようとするかのようにこちらに向けられた。

「影皇女は、六尺豊かで、素手で大伴の兵を殺すほどに大力で、髪は縮れていた」

皇子の眼に涙が浮かび、声が震えた。稗田阿礼は、膝を進めて皇子ににじり寄り、手のない腕を伸ばして眼の縁に触れた。涙が、腕の先端に滴り落ちた。

「影皇女は……吾田媛に似ているか」

阿礼は大きく頷いた。

「では、やはり……」

皇子は、阿礼の腕を優しくつかんだ。

「吾が母は吾田媛。影皇女は吾が妹」

阿礼は再びうなずいた。

皇子はうなだれた。

苦屋のうちを、しばし沈黙が支配した。

「稚建皇子よ」

笹葉が立ち上がった。

「吾らが知る史は、ここまで。後の史は、汝自らが調べよ。疾う、宮処に戻れ」

皇子は、ゆつくりと腰をあげた。

皇子の下腹部が熱く滾^{たぎ}っていた。

真実の史を知ったこと。

それによって皇子の内奥に、新たな欲望が芽生え、渦巻く火となって燃え上がっている

た。その炎は、皇子の脳をも熱く上気させていた。

犯す。

皇后を犯す。

吾が母なる吾田媛を殺した皇后を犯す。

吾が母と偽ってきた皇后を犯す。

「笑っているな」

笹葉が訝しげに問うた。

「何故に笑う」

皇子は応えなかった。笹葉は立ち上がり、皇子に対峙して歩み寄った。

「小碓皇子は、汝と同じく、女童のごとき男であつた。皇子は、その性、陰険にして、乱を好んだ。汝は、山より去れ。去つて宮処を乱せ」

言うなり笹葉は、皇子の股間を蹴り上げた。

火照っていた皇子の四肢が、新たな灼熱の激痛に包まれた。

皇子の膝が落ちた。急速に落下しゆく皇子の眼に、口を開けて哄笑する稗田阿礼が一瞬、映った。

ついで笹葉は、皇子の頭を蹴った。

皇子は昏倒した。

気がつけば皇子は、昨日笹葉と出会った谷川のほとりに、股間を両手で押さえ、呻きながら臥せていた。

皇子はよろよろと身を起こし、腹から苦いものがこみ上げ、嘔吐した。

「影媛は如何か」

ひげ面の兵士が問うた。

「薬が効いた」

「脚を広げて、陰を見せて、寝ている」

三人の兵たちは、互いの貌を見、歪んだ笑みを浮かべた。

かの、稚建皇子と春日郎女が、苦屋のうちで息長皇后が「影媛」こと影皇女を攻め苛むを見た夜、見張りについていた兵どもであつた。皇后が到着する前、大方の影皇女を縛るために、彼らは眠り薬を与えられた。その一部を、兵たちは使わずに隠し持っていた。

今宵は、皇后は来ない。影皇女に薬を盛つたのは、むろん、兵ども自らの欲を満たすためであつた。

兵たちは、そつと扉を開け、なかに入った。

影皇女は、あおむけに四肢を広げて寝入っていた。衣がはだけ、なめらかな脚や、豊かな胸乳がさらけ出されていた。

いちばん年かさの、ひげ面の兵が袴を脱ぎ、皇女を覆うように屈み込んだ。彼の陽物は、

熱く滾る血に圧迫され、はちきれそうにそそりたっていた。

「疾う、すませよ」

「待ちきれぬ」

背後に並んだ二人の兵が、卑猥な面もちを浮かべて囁した。

ひげ面の兵は、ちらと背後を振り返って笑い、右手で一度、己が陽物をしごきあげ、そろそろ腰を沈めた。

そのとき、影の皇女の大きな眼が、くつきりと瞼を開けた。

肉厚な唇が、かすかに歪んだ。

ひげ面の兵は、寝入っていたはずの皇女に見据えられ、狼狽して身を起こしかけた。

皇女の膝が、思い切り突き上げられた。膝は、兵のふぐり玉を押しつぶし、彼の全身を押し上げた。

兵の軀は、一瞬、空中に浮かび、どさりと床に落ちた。眼が苦痛と衝撃に見開かれていた。

皇女は跳ね起き、残る二人の兵どもに飛びかかった。

何が起こったか腑に落ちぬまま、二人の兵は皇女に左右の手でふぐり玉をつかまれ、ぐいと捻られ、皇女の長い指で潰され、激しく痙攣して血反吐をはき、くずおれて動かなくなった。

皇女は振り返り、床に腹這いに臥せ、両手で股間をおさえて痙攣するひげ面の兵を見下

ろした。その首筋に踵を載せ踏み潰した。ひげ面の兵は首の骨を踏み折られ、絶命した。他の二人の兵も同じように命を奪われた。

影皇女は、ゆっくりと扉を開いた。背後に横たわる三つの屍に気もとめず、闇夜の空に銀色に輝いて浮かぶ月を、童子のように澄んだ眼で見つめていた。

風が吹き、皇女の縮れた髪を揺らした。

皇女にとって、物心ついて後に初めて見る外の世界であった。その唇が動き、声が漏れた。

「あ……に……」

春日郎女は、寝つけぬままに寝屋の筵で半身を起こした。

傍らを見下ろした。

誰もいない。

四囲を見回した。

いない。

稚建皇子が、王宮より姿を消して、三日が過ぎていた。息長皇后は、豪族どもや王宮の兵どもを走らせ、皇子の行方を追っていた。

春日郎女は、皇子がいづくに姿を消したか、察していた。

比叡の滝に、かの白髪的女を探しに赴いたに違いない。

彼女はそのことを、皇后にはむろん、父なる大伴金村にも告げてはいなかった。だが、皇后はともかく、金村もまたそう考えていたらしく、皇后の前では慌てふためいた様を見せながら、邸に戻ればかたちばかりに二十の兵を淡海とは反対の方向に走らせ、皇子のこなど念頭のないかのような落ち着いた素振りを隠そうとはしなかった。

皇子が比叡に向かったことは、春日郎女には意外ではなかった。ただ、郎女に何も告げずに消えたことが、彼女の胸のうちに不快なさざ波をたてた。皇子は、「妹を手厚く扱え」と言ったが、郎女はそのことを金村には告げず、苦屋に閉じこめられた影皇女の扱いを改めさせようとはしなかった。

夜になれば、ひとり寝屋に入った郎女は、皇子が忍んでくるのではないかと心のうちで待ち望んだ。

皇子は、吾がもの。

それが、郎女の願いであり、父なる大伴金村の意に沿うことであった。

かつての皇子は、春日郎女のものであった。いまの皇子は郎女のものではない。

皇子は、郎女よりも影皇女をいとしく思っている。

皇子は、郎女よりも息長皇后と快を伴にしたいと願っている。

郎女は、それを認めたくはない。しかし、それを打ち消すには、郎女は聡明すぎた。故に、郎女の心はささくれだち、しばし夜半に寝覚めた。

「郎女……」

不意に声がした。

皇子の声ではなかった。振り向くと、寝屋の入り口に、丈の高い若者が立っていた。

「室屋か……」

郎女は、身を固くして寝着の袂を掻き合わせた。

「今宵も、皇子は来ぬか」

二十歳になる大伴室屋は、従兄にあたる。この時代、母の違う兄妹の恋は、禁忌とはされてはいない。

郎女にとって、室屋は初めて肌を合わせた男だった。初めての逢瀬は、激しい痛みのみを、郎女の軀に刻みつけた。二度目の逢瀬は、男に快をもたらす力を、目覚めさせた。三度目より、郎女は男に快を味わわせ、支配することを覚えた。

郎女にとって、室屋はそれだけの男だった。だが、室屋にとってはそうではない。

稚建皇子が、郎女の寝屋に通うようになって以来、同族の男たちがそこに忍んでゆくことは憚られた。郎女と皇子が婚うことが、一族の主たる大伴金村の本意である以上、郎女は彼らにとって、触れてはならぬ玉となった。

その皇子が、郎女の寝屋より遠のいた。玉は再び、大伴の若者たちに戻ってきた。室屋はそうであってほしいと願い、そうであることを確かめに、郎女の寝屋を訪なったのだ。

「郎女よ」

室屋は、郎女の傍らに擦り寄り、その頬を撫でた。郎女は、室屋の頬を掌で打った。室

屋の眼が、怒りを帯びて見開かれた。大きな掌で、郎女の細い肩をつかんだ。

郎女の手が、室屋の股間に伸びた。室屋の貌が強張り、手の動きが止まった。

「室屋、汝は無理強いに吾を姦すか」

郎女は、ふぐり玉を挿んで軽く捻りあげつつ、まっすぐに室屋を見つめ返した。

「さあらば、汝がふぐり玉を潰す」

「郎女……」

室屋の貌が苦痛に歪んだ。

「皇子が、難波に戻ってくるまで……いま一度……」

「いま一度……」

郎女の貌に、権高な笑みが浮かんだ。

「快を味わいたいのか」

「然り」

室屋は、何度もうなずいた。郎女は、彼の股間から手を離した。

ゆっくりと唇を舐め、若者の股間に、貌を沈めた。

室屋の逞しい腹部が激しく波打ち、荒い息遣いが唇から漏れた。

郎女は、自らが与える快に男が身をよじらせ、苦しげに貌を歪め、呻くのが好きであった。

陽物から唇を離し、手でつかんで扱きつつ、耳たぶを柔らかく噛み、仰向けに伏して、愉悦に身を振るわせる室屋を、冷え冷えとした眼差しで見下ろす。

「心地よいか」

悠然と訊ねる。室屋はあえぎつつ、幾度もうなずく。

女童のようにたおやかな稚建皇子の、快に悶える様を見るとき、郎女の胸には、幼子を見る母のような愛おしさが満ちあふれる。

室屋をはじめとする大伴の健児に対しては、侮蔑の念しか抱けなかった。侮蔑すればこ

そ、郎女は平然と男どものざらざらした肌に、舌を這わせることができた。

だが、今の郎女は、室屋を侮蔑すればするほど、胸の苛立ちが募るばかりであった。

彼女は室屋から身を離し、ついと立ち上がった。

「郎女……」

室屋は突き飛ばされたような面もちで、半身を起こした。

「如何した」

「興が乗らぬ」

郎女は、乱れた衣をつくろい、片膝をたてて背を伸ばし、彼に背を向けて坐した。

「何故に」

そう問う室屋の陽物は、そそりたったままだった。それをうかがい見て、郎女は唇を歪めて笑みを浮かべた。

「汝では、輿が乗らぬ」

郎女は立ち上がり、寢屋の扉を開けた。扉は、庭に面していた。墨を流したように黒々とした空に、蒼い月が皎々と浮かんでいる。

「郎女……」

背後で金属のかすれる音がした。

振り返ると、室屋は裸のまま、剣を抜いていた。その貌が白く凍りついていた。

「そこまで男を、蔑ろにするか……」

郎女は、身を固くして後ずさった。

室屋は、剣を床と平行に構え、じりじりと間合いを詰めた。

郎女は叫ぼうとした。だが、恐怖に強張った軀からは、息を吐き出すことすらできなかつた。

そのとき、背後で悲鳴がした。

石のように固まっていた郎女の四肢が、その悲鳴で解き放たれた。

振り向いて眼に映ったのは、ふたつの人影が絡み合う様だった。一人が、仰向けに地面に倒れた。もう一人は、肩を上下させながら貌を上げ、左右を見回した。

月あかりが、乱れた長いちぢれ髪と、粗末な貫頭衣を纏った、たくましい四肢を照らし出した。

「影皇女……」

郎女は眩き、眼を見開いた。

倒れているのは、血にまみれた兵だった。

「誰ぞ！」

郎女の背後で室屋が叫び、郎女の傍らをすり抜け、剣を構えて庭に飛び出した。

影皇女が跳躍した。長い脚が蹴り上げられ、したたかに室屋の股間を打ち、室屋の軀は雷に打たれたようにのけぞった。

影皇女の腕が伸び、室屋の首を脇に抱えて締め上げた。骨の碎ける音が響いた。

室屋の軀は、熟した木の実が地に落ちるように、くずおれた。

郎女は、小さく叫んだ。最前まで命をもって動いていた室屋の軀は、魂が抜け、ただの屍となった。首が奇妙にねじ曲がり、白眼を剥き、唇から血が垂れている。

影皇女は、郎女の叫びに貌を向けた。額にかかった縮れ毛の隙間から、獣のように光る大きな瞳が見えた。

郎女は、両腕で己が身を抱き、おのき震えた。

だが、影皇女もまた、動かなかつた。瞳が悲しげに潤み、口が動いた。

あ……に……

影皇女は身を翻し、走り去った。

「吾、過あやまてるか……」

大伴金村は、苦しげに貌を歪め、口と股間からべつとりと血を噴き、無惨に転がっている三つの屍しかばねを見つめながら、ひとりごちた。

皇女を閉じこめていた苦屋を、松明たまつをかかげた兵どもが囲み、破られた扉の前に、大伴金村が一族の主立った者を従えて立ちつくしていた。

兵どもの死は、心に掛けるほどのことはない。三年前、影皇女を姦そうとした兵どもが殺されてより、大伴が治める里から徴集された兵どもは、彼女を閉じこめた苦屋の警護をいやがるようになった。苦屋を守るのは、いずれも里から追われ、行き場のない無頼の者どもであった。

影皇女の豊かに実った胸乳、広く張った腰、長い四肢、整った貌などを思えば、若い兵どもが、肉しむの欲に負け、許されざる所行に及ぶのは、仕方がない。

誤算は、影皇女が苦屋から姿を消し、邸の外に出たことであつた。三年前、兵どもを殺した影皇女は、苦屋の片隅で震えるばかりだった。物心ついたのち、この狭い苦屋しか知らぬ皇女には、そこから外に出るなど考えも及ばぬのであろう。金村はそう思っていた。

しかし、皇女は逃げた。苦屋を出て庭を突き切り、門を破って逃げた。苦屋から門まで、兵や下部どもの屍が転々と転がっている。やがて影皇女影皇女の存在は、難波の宮処じゅうの者が知るところになるだろう。

金村は、忙しく頭を働かせた。

春日郎女から、比叡の滝での出来事を聞いた金村は、郎女をして稚建皇子を影皇女に会わせた。皇子の出奔を耳にしたときも、皇子が再び比叡に赴き、稗田阿礼に会いにいったことは察しがついていた。皇子が阿礼に再び会い、隠されてきた真実の史を聞いたのならば、それでもよし。会えずに帰ってきて、またよし。宮処を離れた鄙の僻地で、命を落とすことがあつても、打つ手はある。

息長皇后の治世は、ひたすらな敵の排除でしかなかった。公然と敵意を表す者は兵を動かして抹殺する。敵意を抱きそうな者があれば、かの三人の宮女どもを遣わし、ふぐり玉を潰す。

金村は注意深く、皇后が大伴の一族に警戒心を抱かぬよう、意を払った。皇后に寄り添いつつ、敵となりうる豪族どもが次々と没落する様を、高見より眺めていた。

とはいえ、今やヤマト随一の豪族に成り上がった大伴を、皇后が次なる敵と目する時はいずれ来る、と金村は見ていた。すなわち、金村にとって次ぎに目指すべきは、皇后を排することであつた。排せぬまでも、その威光を弱めることであつた。

ただ一人の日継の皇子が、皇后が行つた悪行の数々を知り、血のつながりのないことを知れば、それもよし。皇子は、ひよわだが聡い。ひよわで年若ゆえに、郎女の父たる金村に頼るしかない。

皇子が死ねば、他に日継の皇子たるべき者を持たない皇后の威光は消え去る。それもまた、よし。血の威光を失つた皇后は、金村の財力と兵力に頼るしかない。

だが、皇子がいまだ難波に戻らぬ今、影皇女が宮処のあちこちで騒ぎを起せば、大伴にとつて失態となる。かの女をみなが先の大王の皇女であることを、他の豪族どもは知りつつも、それを口にするのではない。彼らは、皇后と偽りの史を共にすることで命脈を保ってきたのだ。すなわち、大伴の邸を飛び出した狂女が、難波の宮処のあちこちで人を殺めたという事実のみが残る。皇后は公然と、金村を罰しうる。

「吾が父……」

声に振り向けば、いつの間にか傍らに春日郎女が、蒼白の面もちで立っていた。

「郎女」

金村は、今にも倒れそうに震えている郎女の両腕をつかんだ。郎女は膝を折り、父の胸にくずおれた。

「室屋が死んだ」

「室屋が……」

金村は眉をひそめた。室屋は、一族の若者のなかでも、剛毅で武に優れていた。いずれ、大伴を支える一人であった。

「影皇女が、室屋を殺した」

郎女は、激しく身を振るわせ、声を絞り出した。

兵や下部どもならずともかく、同族の若者が殺されたとあれば、室屋に近い者どもより、金村を難じる声が出るに相違ない。一族の主たる金村自身の威光もまた、危うくなる。

「汝は、見たのか」

金村は、郎女を抱きしめつつ、その貌を覗き込んだ。

「影皇女を……」

「見た……」

郎女の眼から涙があふれ出た。

「室屋を縊り殺すのを、見た」

郎女は地に膝をつき、激しく嘔吐した。

「郎女を寢屋へ運べ。心が静まるまで、誰か付き添うておれ」

金村は、下部や婢どもに命じた。下部どもが郎女を抱きかかえて去り、婢どもがその後に付き従った。

「羽生」

金村は、傍らに控える弟を呼んだ。大伴羽生が進み出て膝をついた。

「疾とう兵どもをできうるかぎり多く集めよ」

「諾」

羽生は頭を垂れて拝礼し、貌をあげて問うた。

「兵どもに影皇女を捜させるか」

「否」

金村は応えた。

「吾が馬を。吾自ら兵どもを率い、王宮を守る。汝は邸の門を固く閉じ、何者も入れるな。夜が明けるまでかがり火を絶やさず、変事があらば、すぐさま王宮に使いを走らせ、吾に知らせよ」

しらじらと夜が明け始めていた。

小賢しき奴……。

息長皇后は、寝屋の入り口に矛を擬し、こちらに背を向けて立つ大伴金村に、胸のうちで毒づいた。

十六年閉じこめてきた影皇女が逃走した。その知らせを持って現れた金村は、二百の兵を王宮の四圍に並べた。皇后の御身を守護するため、と金村は言うが、二百の兵が守っているのは皇后ではなく、金村自らであることは明らかだった。

影皇女を逃したことで、金村は当然罰せられねばならない。だが、金村が率いてきた兵は、王宮を守る兵に倍する。しかも、王宮の兵どもも、そのほとんどは大伴が供した兵なのだ。

武装した大伴の兵に囲まれ、皇后自らの手足となって動くのは、いま、寝屋に集まってきた八須女、香和女、葉津女、三人の宮女しかいない。他の宮女や下部どもは、二百を越える大伴の兵の前では、あまりにも無力であった。

いつしか、皇后は大伴に頼りすぎていた。他の有力な豪族は、他ならぬ皇后の意によつ

て粛清された。皇后を支えるべき同族の建内たけしうちの家は、十六年前、族長にして先の大王の重臣であった建内宿禰の死以来、内紛を繰り返し、時には皇后にも刃を向け、同族相撃ち、衰えていた。

稚建皇子は姿を消し、いまだ見つからない。吾田媛の忘れ形見の影皇女は、難波の宮処のいづくかにおり、いづれ人の知るところとなるだろう。

稚建皇子の不在は皇后の威光を危うからしめ、影皇女の存在は皇后がかつてなした悪逆——大王を殺し、大王の妃を殺し、大王の皇女を殺した——を世に曝すことになりかねない。

やはり頼るべきは、大伴の兵力しかない。故に皇后は、金村を罰することはできない。

金村はそれを承知で、兵を率いて王宮を訪なつた。そういう金村を、皇后は憎んだ。彼に抗しうる豪族を仕立てねばならない。だが誰を？

思案をめぐらす皇后の耳に、慌ただしく回廊を駆けてくる足音が響いてきた。

兵が一人、金村の傍らに跪き、何やら耳打ちし、再び去った。

金村は立ち上がった。

「皇后」

向き直つて拝跪した。

「かの女が現れた」

「いづくに」

皇后は腰を浮かせ、三人の宮女どもは劍を手に立ち上がった。

「王宮の御門の前に」

金村は、驚愕する女たちを見回し、制するように静かな笑みを浮かべた。

「御心を安んじよ。もはや吾が兵の手の内にある」

うづくまる一人の女を、百を越す兵が弓を構えて囲んでいた。

影皇女は、両の手で左右の太股を押さえ、貌を歪めて呻いていた。太股に一本ずつ、矢が突き立っていた。

彼女の貌も、衣も、どす黒い血で汚れていた。彼女が流した血でもあり、彼女が殺した十数の男どもの返り血でもあった。

王宮の門が開いた。

「皇后である」

金村の声に、兵を束ねる三人の兵長が跪いて拝礼した。

金村に続いて、三人の宮女に前後を守られ、四人の下部が担ぐ輿に坐した息長皇后が、姿を現した。

「女は、膝を射抜かれ、動くこともできない」

金村は膝をつき、輿の上の皇后を見上げた。皇后は凝然と、手負いの獣のように苦しげに呻く影皇女を見つめた。

「如何するや」

金村は問うた。

「生かして捕らえるか。矢を浴びせるか」

皇后は、貌を動かして金村を見た。

その眼には、主の命を待つ犬のように、何の感情も浮かんではいなかった。

この場で影皇女を殺すべきか否か、皇后は迷った。生かして捕らえればどうなるか、殺せばどうなるか、答えは見つからない。金村は、いずれの答えにも、応ずべき策をすでに練っているに違いない。

遠くから馬蹄の響きが聞こえてきた。数名の豪族どもが、変事を聞いたのであろう、兵を引き連れ、駆けてきた。

「金村！」

皇后は、彼らに聞こえるよう、声を張り上げた。

「この女は、汝の邸より出で来たる者。さあらば、汝が裁量に委ねる」

皇后を見上げる金村の眼に、一瞬冷たい光が宿った。

金村は、駆けつけた豪族たちが、皇后の声にどのような面もちでいるかを眼で確かめる愚は犯さなかった。皇后は、彼らに、変事は金村が責を負うべきものと告げた。となれば、彼らの前で、取るべき手はひとつしかない。

金村は立ち上がり、跪く兵長に向かって怒鳴った。

「この女は、何に取り憑かれたか、吾が甥室屋を殺し、多くの人を殺した。生かしておいては、さらなる惨を犯そう。疾く射かけよ！」

「諾！」

兵長は剣を抜いて高くかざした。

「構えい！」

兵どもが、一斉に弓を引き絞った。伸びきった弦が震え、軋んだ音を立てた。

影皇女は貌を上げた。その眼が悲しげに見開かれた。

「ああああああ……」

腹の底から振り絞られた叫びに、兵長は、次の命を下すことを一瞬忘れた。

「いいいいいい……」

「待て！」

遠くで声がした。

皇后も、金村も、兵どもも、影皇女に注がれていたすべての眼が、声に向けられた。

「待て！」

ひとつの人影が駆け寄ってきた。

稚建皇子だった。

「あ……に……」

兵どもの垣を突き破るようすり抜け、皇女の前に身を投げ出した稚建皇子に、影皇女は左右の腕を伸ばして抱きついた。

皇后は、両手で膝をつかみ、握りしめた。

「あ……に……」

影皇女は、無我夢中で稚建皇子の貌に、頬を擦り寄せた。

「皇子……」

宮女の八須女が呻き、皇后を見上げた。皇后は、かすかに唇を振るわせている。

「金村！」

皇子の鬢は解けて髪は乱れ、衣のあちこちは裂け破れ、沓は泥にまみれていた。

狂ったように抱きつく影皇女の腕の下から、皇子はしわがれた声を絞り出した。

「兵を退かせよ」

大伴金村は、皇子を見つめ、背後の皇后をひそかに見やり、一瞬、唇を歪めて笑みを造った。

「兵長！」

金村は命じた。

「囲みを解かせ、兵どもを下がらせよ」

兵長は戸惑いつつもうなずき、手で合図した。兵たちは弓を降ろし、矢を籠に差し戻し、王宮の扉際に並んだ。

皇子は安堵の息を漏らし、彼の胸に貌を埋めて泣きじやくる影皇女の肩を抱いた。

「金村……」

皇子の声に、金村は歩み寄って膝を突いた。皇子は、皇后たちに聞こえぬよう、声を潜めた。

「影皇女は吾が妹。手厚く扱えと、春日郎女に言った」

金村は一瞬首を傾げたが、すぐにうなずき、拝礼した。

「手厚く扱うか」

皇子の問いに、金村は「諾」と囁き返した。背後で皇后が、彼らの交わす声を聞こうと首を伸ばす気配がした。

皇子は言った。

「疾う汝が邸に運び、傷の手当をせよ。吾もともに行く」

金村は微笑み、立ち上がって兵長を手招きした。

皇子は、影皇女を抱いたまま、皇后に貌を向けた。

「皇后よ」

息長皇后は、瞳を動かして狼狽した。

皇子は知っている。

知っているからこそ、影皇女を庇った……。

「今宵、吾は大伴が邸にて休む」

皇后は、言葉を返せぬまま、身動きもしなかった。

「金村！」

皇子は、皆に聞かせるように叫んだ。

「吾は汝が娘、春日郎女に妻問いする。郎女が諾すれば、汝が邸のうちに吾が宮を建てよ」

金村は大きく頷いた。

この時代、大王家の皇子は、生まれればすぐに有力な豪族に預けられ、成人するまで養われる。稚建皇子が、皇后の手元で育ったのは異例であった。

春日郎女を妻とすれば、金村がその領内に宮を建て、皇子の住まいとなすことも、慣例に背かない。

門の扉が開き、下部たちが輿を持って現れ、稚建皇子と影皇女の傍らに置いた。皇子は、皇女を抱いたまま立ち上がり、輿に乗った。

吾田媛の忘れ形見が二人、輿に乗り、二百の兵どもの荒々しい足音とともに去ってゆくのを、息長皇后は息を詰めて見送るしかなかった。